

郡山吉江著

三里塚野戦病院日記

柘植書房



三里塚野戰病院日記

郡山吉江著

柘植書房

著者略歴（こおりやま よしえ）

1907年 仙台市生れ

1931年 詩人郡山博（ペンネーム弘史，プロレタリア作家  
同盟会員）と結婚，二児を生む

1945年 日本共産党に入党，仙台地区委員会婦人部長（初  
代）婦人民主クラブ仙台支部長（初代）等，大衆  
運動の先頭で活動

1948年 上京，50年分裂で共産党除名となる。上京以降現  
在まで日雇いで生活を支えながら婦人民主クラブ  
等で活動，その間夫君，長男を病で失い自らも子  
宮ガン手術をうける

1968年 新宿騒乱から救援活動に参加

1971年 救援連絡センター世話人，現在運営委員

1978年 直腸ガン手術をうけ，現在自宅療養中

住所 東京都清瀬市元町2—9—8

## 三里塚野戦病院日記

0030—41012—4819

1979年12月31日第1刷発行

定価1300円

1980年1月30日第2刷発行

著 者 郡 山 吉 江

発行所 株式会社 柘 植 書 房

東京都千代田区神田神保町1—46—2

電話(03)291-0991 振替東京 3-43287

落丁，乱丁木はお取り替えいたします。松沢印刷・印刷 根本製本・製本

## 序

荒 畑 寒 村

この本の著者郡山吉江女史は、もう老齡の上に輕からぬ病を抱いて居られると聞いているだけで、まだお目にかかつて居ません。そういう未知の人の著書に序文を寄せるなど無責任の譏りをまぬがれません、一つには畏友水戸巖教授のご依頼があったのと、この著者が私と同様、老病こもごも到る身を以て三里塚闘争の渦中に投じ、官憲の暴戾な迫害とたたかって人民の自由と権利を守る、勇俠果敢な行動に感激して引受けてしまったのです。

私自身、老齡に加えて宿痼に苦しんでいる上、序文寄稿の時間が切迫しているものですから、実は本文を熟読する余裕がなく匆卒に執筆しなければなりません。やむを得ず抜き読みする程度にとどめざるを得ませんでした、それですらこの著書に描かれている三里塚闘争の実状のすさまじさ、内乱同様の凄惨な情景が痛感されます。

こう申す私もそうなのですが、三里塚闘争を新聞記事で知っているだけの人は、本書の一節に描かれている左の如き記事をどう思うでしょうか。

数百人の機動隊がブルドーザーを先頭に斜面を駆け降りて来て……少数の同盟員や支援者をメッタ打ちにし、新型ガス弾をボンボン射ちまくった。このガス弾は色も匂いもなく酸素吸入を必要とするほど毒性が強い。……呼吸困難に陥って倒れたところを逮捕するが、その上にも警棒でメッタ打ちにし、昏倒した学生の顔を砂の中におしつけて窒息寸前に追い込む。

機動隊は担架隊が負傷者を救出するのを妨害し、負傷者を曳きずり廻して逮捕した。担架隊は麻袋の両端に青竹を通し、前後四名と「野戦病院」と書いた桃太郎旗をもった一名、五人組が先導する組織であるが、負傷者が多くなるとあらゆる任務の全部隊が負傷者の救出介抱に集中する。著者は炊事班なのだが、多量に用意した毒ガスのための洗眼用薬液がたちまち払底するのでセッセと薬液をつくり、炊事班は全員介護者となって傷口の洗滌、治療の助手、ガス液でぬれた衣類の着替えに没頭する。入れ替り立ち早りガスを浴びた負傷者の出入でテント内はガスが充満し、マスクを通して咽喉がヒリヒリし、鼻の奥まで刺激され、眼はショボショボとなる。この時は二月の寒中で負傷者二百名、そのうち日赤病院送り五名、逮捕者百四十一名、野戦病院は毒ガスと血と汗と泥の中にあった。

この部分的な抜き書きからだけでも、三里塚闘争における機動隊の残虐な行為は、まるで戦時の敵軍に対するが如くで、とうてい同じ日本人に対する行為とは思われないことが解ります。

著者の郡山吉江女史が私に寄せられたお手紙の一部に、「読んでいただければ解ることなのですが、私はもの書きでもなく、文章も充分わからず、つづり方に過ぎぬもので」云々と、本書の措辞行文について卑下していられました。然し、実際は三里塚の闘争に象徴された人民の自由と権利を守る人々の悲壮な苦戦、政府の軍隊を向うに廻した勇敢な奮闘の情景が、読んでるのが辛くなる程、活いと描かれていきます。私は多くの人にぜひ本書を読んでいただきたい、そして七十歳の高齢であり、且つ重病の一婦人がかくも激烈な闘争に参加している理由を、一考していただきたい。

三里塚の少年行動隊員が、

「……自分の土地を守るといふのは人間として当然のことだと思うのですが、同じ友達のおとうさんおかあさんは警棒でぶったたかれる、胸をけられるの狂人的、かつ殺人的なことをされています。でも、残念にも国家のしていることです。から機動隊にはこれという罰はありません。そして学生さんの頭を火の中に突っこんだり、女子大学生の口の中に警棒を入れ、ねじりまわし歯をだめにしてしまったり、とても考えられないようなことを平気でやっているのが……機動隊です……」

と書いているのは、主権在民と称する日本のいわゆる民主主義憲法に対する抗議、弾劾ではありませんか。私は郡山吉江女史の本書によって、この三里塚芝山少年行動隊の日本国家に対する抗議と弾劾が、全国にわき上がらんことを期待します。

三里塚には各地区に野戦病院と称する屯所があつて、本書の著者は実はその野戦病院の炊事班、つまり飯炊きを任務としていたそうです。

食費は一日百五十円の定めで、平生は二、三十人が常駐しているのですが、大集会があると一挙に三百人にも膨れ上がるそうです。その一例をあげて見ますと、三百人分の朝食用に豆腐三十丁、ガンモドキ（二人一個）二百個、牛乳四百人分、ゆで卵五百個。著者は闘争参加以来、炊事係をつとめて、毎日午前三時から午後九時まではたらき、寝るのは十時だったといえますから、気まぐれや出気心のできる仕事ではありません。三里塚闘争に参加挺身している著者のような多くの人々の犠牲、労苦に対しては、私達もまた物心両面の援助を吝むべきではありません。

反権力闘争や反公害闘争は、今後ますます多く烈しくなるでしょう。闘争が大規模となり激烈となるにつれて、闘争の裏方すなわち裏面にあって戦士の面倒を見、世話を引受ける組織運動がまた必要になります。現在、全国各都市に設けられて活動している救援連絡センターは即ちそれで、表面の戦闘部隊に対する裏面の赤十字部隊とも申せましょう。その赤十字活動の実況報告がすなわち本書です。正義と人道を愛する方々の愛読をお願いいたします。

一九七九年十二月二十一日

序……………荒畑寒村

第一次強制代執行——めしたきからの報告——一九七一年二月～七月………9

野戦病院へ……………11

野戦病院へ——二月二十一日——(11) まさに「野戦」(14) 「もう遅い」(16) 野戦病院の周辺(19) 廊の勝負(21)

強制代執行はじまる……………24

一〇〇人分のカレー——二月二十二日——(24) 大失敗(28) 「代執行の御飯は堅かった」——二月二十三日——(29) 救援運動と内ゲバ(31)

野戦病院の活動……………34

野戦の組織分担——二月二十四日——(34) 少年行動隊がやられた(37) 「毒ガス監視団」(38) 三〇〇人分のめしたき(45) おかしな女(47) 炊事班の朝——二月二十五日——(49) スパイ？(51) 「啖呵」(54) 負傷者続出(57) 弁護団と法対部(59) 「おっこちてしまった」若者(61)

少年行動隊……………64

ベトナム・三里塚・野戦病院——三月二十六日——(64) 「先生、教えてください！」(67) 休戦(76)

食料カンパ……………78

「カナ文字と漢字」への疑問——二月二十七日——(78) 鯖の味噌煮(81)

予算オーバー(82) 食料カンパへ——二月二十八日、三月一日——(84)

「観覧席」も戦闘部隊に……………88

小川明治さん四十九日忌——三月二日——(88) 機動隊のリンチ(91)

テント村の食事(93)

機動隊の暴挙……………94

雨の中、ケガ人続出——三月三日——(94) 検問(97) 茶番劇(100)

野戦病院の若者たち……………102

自分の食器は自分で——三月四日——(102) 衿巻の君(104) 猫の手は借

りられない(106) メーデー事件と「クロ」の思い出(108)

とりでの攻防……………112

負傷者三〇七名——三月五日——(112) つらい論争(115) 「私服」への

治療(117) いっときの休息(119) 弾圧のエスカレート——三月六日——

(121) 権力の正体(124) 一本松の残虐(126) 地下壕の闘いへ(130)

地下壕の闘い……………131

「死者が出ておかまわぬ」——三月八日——(131) 「法的根拠」はなし(135)

休戦——三月九日——(137) 帰宅——三月十日——(140)

やみ討ち撤去……………143

|                                  |                         |
|----------------------------------|-------------------------|
| やみ討ちの地下壕撤去——三月二十五日——(143)        | マスコミの報道(147)            |
| さらば六月決戦まで(149)                   |                         |
| 四月から六月まで.....                    | 151                     |
| テントからプレハブへ(151)                  | 野戦病院闘争宣言(155)           |
| 襲撃(156)                          | 武装ガードマンの                |
| ふたたび地下壕の闘いへ.....                 | 157                     |
| 闘争再開——七月二十四日——(157)              | おこげ騒動(160)              |
| された——七月二十六日——(163)               | 地下壕戦に勝つ——七月二十七日——       |
| (165)                            | 公団「敗北宣言」——七月二十八日——(166) |
| 七月三十日——(167)                     | 最後の闘い——                 |
| 第二次強制代執行——駒井野の闘い——一九七一年九月——..... | 171                     |
| 闘争前夜.....                        | 173                     |
| 野戦病院、天神峰へ移転——九月十四日——(173)        | 闘争準備(176)               |
| がたかったお手伝い——九月十五日——(177)          | 水のみ場の大声(178)            |
| 命的祭り」前夜(180)                     | 「革                      |
| 九・一六——駒井野城の闘い.....               | 182                     |
| 機動隊の投石(182)                      | 警官の死(186)               |
| 二時間で負傷者八五名(193)                  | 駒井野鉄塔への殺人的攻撃(194)       |
| 常時体制へ(195)                       | 野戦、非                    |
|                                  | 森永牛乳事件(190)             |
|                                  | ガサ入れ(188)               |

|                                     |     |
|-------------------------------------|-----|
| 大弾圧……………                            | 227 |
| 弾圧はじまる——九月十七日——(227)                |     |
| 新聞報道の怪(230)                         |     |
| 左翼文化人への腹立ち(232)                     |     |
| 大木よねさんの闘い……………                      | 236 |
| カンパへの反応——九月十九日——(236)               |     |
| よねさんへのだまし討ち——九月二十日——(240)           |     |
| 帰宅(242)                             |     |
| 三里塚——闘いの日々——闘いに倒れた人々……………           | 245 |
| 三ノ宮文男君の死——一九七一年九月三十日——……………         | 247 |
| 大木よねさん逝く——一九七三年十二月十七日——……………        | 252 |
| 野戦病院でともに闘った東山薫君の死——一九七七年五月十日——…………… | 255 |
| 凍りつく旗のもとで——一九七八年二月六日、七日——……………      | 260 |
| 管制塔占拠の日——新山君の死——一九七八年三月～六月十三日……………  | 263 |
| 戸村一作さんを悼む——一九七九年十一月二日——……………        | 267 |
| あとがき……………                           | 270 |
| 年表 三里塚闘争弾圧の十四年……………                 | 274 |

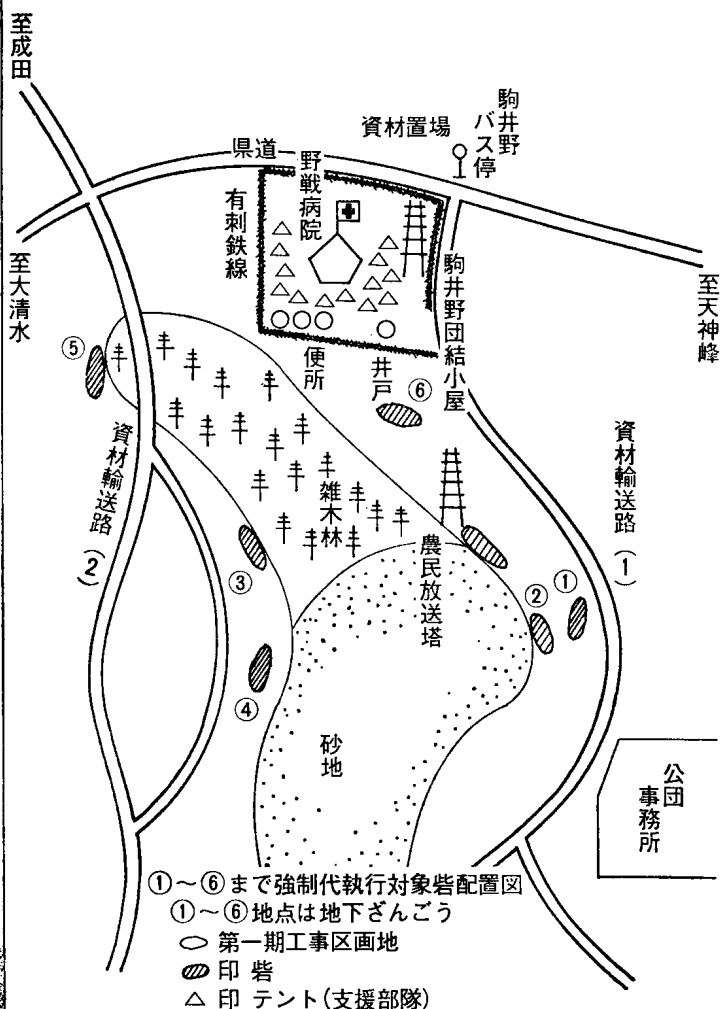
写真 福島菊次郎ほか  
装丁 鈴木 堯

△資料…救援連絡センター、三里塚芝山連合空港反対同盟その他発行のパンフレットなど▽

第一次強制代執行——めしたきからの報告——一九七二年二月～七月——



# 第一次強制代執行周辺見取略図



# 野戦病院へ

野戦病院へ——二月二十一日——

京成電車を成田駅で降りると、駅前のバス停には長い列が続いていた。成田国際空港予定地に第一次強制代執行が行なわれるという前日である。

予定地とされた芝山、三里塚の農民が、空港建設に反対し、ここ数年来、頑強に反対し続けていたが、その予定地に、明日から測量の杭打ちを行なうという。その強制執行を阻止する闘いが始まるのである。

「駒井野はどれに乗るのですか」と聞くと、「これに乗って下さい。大清水で降りて少し歩きます」車掌さんはきわめて事務的にそう答えた。

私はからくさ模様の大ぶろしきの包みを背負って、やつこらしよとばかり乗りこんだ。バスが動きだしてまもなく、「ここが大清水」といわれて降りると、十字路である。気がつくとも「みちしるべ」もない。どちらを向いて歩けばよいのか見当もつかない。ちょうど反対側にバスを待っていた青年の一人に道順をたずねた。「駒井野ならボクも行きます」運よく今降りた一人の青年に声をかけられ、幸先よしとばかりホッとした。

東京ではみたこともないまっさらな空の色である。二月というのに、太陽がカンカンと照りつけまぶしかった。中国製の綿入れの上下を着た私は、たちまち汗だくになってしまった。

——この綿入れの中国服は、一九七〇年、松岡洋子さんを団長とする「基地を闘う婦人代表団」が、中国より招待をうけ、ここ三里塚、日本原、九州の女たちの代表の中に加わり、はじめて訪中をした時のものだ。延安に行きたいという私たちの希望がかなえられ、厳寒の最中だったので、周総理の好意で全員に贈られたものである。その上、延安では、解放軍の緑色の綿入れのオーバーを拝借した。延安とはそれほど寒いところであった。――

三里塚芝山連合空港反対同盟の拠点である駒井野周辺が、第一次強制代執行の対象となり、闘争拠点にはじめて野戦病院が設置された。多くの負傷者がでるであろうことを予測して、医療活動の中心となる医師が、代執行の期間中泊りこむというのである。私は、その食事係として来たわけである。

反対同盟はあしかけ六年の今日まで、強靱な抵抗をつづけ、そしてその間に、多数の逮捕者を出し、負傷者を出している。今次闘争は、今までにない大規模な弾圧が予想され、東京新橋にある救援連絡センターがはじめて、本格的に三里塚救援に取り組んだのである。救援連絡センターとは、六七年羽田闘争以来、急激にたかまった学生、労働者、市民等の闘争時の逮捕者に、現在ある自由法曹団（総評＋共産党）がなんら手を打たず、そればかりか、かえって反動的役割に変身していることに抵抗した人々によって、個別の救援組織が集合するところから始まったのである。

救援連絡センターの役割は、逮捕者対策（負傷者の手当、差し入れ、接見、弁護活動）など多様なものであり、その資金は一般からの浄財によって運営されている。中心目標に、

一、国家権力によるただ一人の人民に対する基本的人権の侵害をも、全人民への弾圧であるとみなす。

一、国家権力による弾圧に対しては、犠牲者の思想的信条、政治的見解のいかんを問わずこれを救援する。（抜粋）

とある。

権力側の強制執行という前代未聞の弾圧には、多数の負傷者の続出が予想され、現地野戦病院へ医師団が常駐することが決まると、まずセンターは、その食事作りの要員を都内各地域救援会に要請した。

私はその時、婦人民主クラブ救援委員会に所属していたので、その要請に応じて、はじめて駒井野に來たわけである。

指示に従って、毛布と下着一組、洗面用具と当座の食料、できるだけ軽くしようと懷中電灯も小型にしてきたのだが、少し歩いているうちに荷が重くなってきた。照りつける陽光に全身汗びっしょりなのに、赤土の舞いあがる向かい風はものすごい。頬やひたいは剃刀で切られるようだ。青年の足は早く、とうとう追いつけず見失ってしまった。道の両側は枯草と、むきだしの赤土、背丈の低い冬の立木である。道をたずねるにも、一軒の家もない。「ままよ、先に進めば行きつくだろう」と、私

は地下足袋で地面を踏みしめるように、風に向かって前こごみで先を急いだ。

道がひらけると、目指す野戦病院はすぐわかった。テントの突端に、赤十字のしるしのついた旗が風にはためいている。「小見川回り駒井野」というバス停の真ん前である。（代執行後、このバス停はなくなった）なんのことはない、これに乗ってくればよかったのである。あの車掌嬢、さては条件派かと苦笑した。

駒井野団結小屋の木組みの檣やぐらから、「農地死守、農民魂を見よ」と、墨痕もあざやかに大書された垂れ幕がさがっている。すぐ隣りに、縦一〇メートル、横八メートルの野戦病院の大テントが、強風にあおられ、バタバタと音をたてていた。

### まさに「野戦」

テントの入口には、見張役の青年がいた。来意をつけると、青年は中に入り、まもなくもう一人の青年が中から出てきた。この野戦病院全体の責任者である。（この青年は、全体会議で選出されたあとでよかったが、今日こんにちもまだ野戦病院に常駐している）

すでにセンターから連絡してあったのだろう、すぐ中に案内された。受付で住所・氏名、所属団体を書きこみ、まず一週間分の食費を納入した。一日一五〇円である。

テントの中は一見雑然としてみえたが、それなりに区分されてある。真ん中から仕切られ、入口から右側が診療部らしく、医療の器具の並んだ机が数個あり、薬品棚はテントの壁際に、そして診療用の粗末なベッドが真白いシートに覆われてそれと並行して置かれてある。数人の人たちが白衣を着て